

## 「遊び心と余裕のある医局ライフ」

「大学や病院の存在意義と使命」は何でしょうか？優等生的な回答としては研究を行うことにより医学の進歩に貢献し、患者に上質な医療を提供すること等となるでしょう。無論、こうした目的があることは否定しませんが、それ以上に大事な目的として、その組織の「構成員の幸福」を忘れてはなりません。医局員が求める幸福とは様々ですが、そのすべてに大学が対応できるわけではありません。よりお金儲けをすることが幸せと思っている人は、大学の使命との間で利害の対立を生じるかもしれませんので、大学組織にはなじまないでしょう。こういう人は、個人事業主になるか、利潤追求を第一目的とした組織で働くのが双方のためにもいいでしょう。

ではどのような形の幸福の追求であれば大学や医局が叶えられるでしょう？医学や病気の真理の探究が何より好きと言う人はもっとも医科大学組織になじむタイプの人だと思いますが、こうした人間は自分を含めて慈恵医大の、殊に外科系医局には少ないと思います。教授や助教授という肩書きを得る、出世するのが目的という人もいるかもせれません。患者の治療や手術が好きという人もいるでしょう。他にも医局の居心地のよさが好きという人や、医局を単なる働き口と捕らえている人など、様々な価値観がありますが、いずれも医局としては大歓迎です。私は教授として、あまり多くを望みません。ただし、最低限のルールはあるでしょう。患者診療においては最新の知識と誠意をもってあたる事、大学の行動規範に従う事、医局ではチームワークを念頭に行動する事などでしょうか？ただし、診療のみでは世間体と言うやっかいなものがあるので、時々研究もしてもらいたいです。

このように様々な価値観や人生観を有する医局員が所属する外科講座で、医局員の幸せの最大公約数は何か、どのような医局・病院であれば大多数が幸せかということを考えると、以下のごとく集約されると考えます。

- 1) 家庭を養うに十分な給料（大学+出張）が得られる
- 2) 医局員が好きな仕事（研究、診療、教育など）に打ち込める環境を提供する
- 3) その一員であることに誇りを持てるような組織であり、より自分の技量を高めることができる組織である

1) の給与は、一教授の権限の及ばない事案ですが、工夫をすることにより少しでも良くすることは出来ます。例えばアルバイトに行く機会を少しでも増やすことです。2) がもっとも大事ですが、より多くの医局員が好きな仕事に打ち込めるようにするには何よりも時間的余裕が必要です。病院勤務には様々な諸用があります。会議、書類作業、先輩から頼まれた雑用、論文執筆、当直、といった避けられない仕事がありますので、こうした税金的仕事を分かち合える仲間が多ければ多いほど、余裕が生じ、自分の好きな仕事に使える時間が増えます。すなわち、1) のためにも2) のためにも、医局員の数は過剰なくらいの方がいいことは明らかです。でも、近年の開業医志向の影響と、また本学、殊に外科学講座の求心力の低下のためなのではないでしょうか、十分な医局

員がおりません。実際本院を含めいくつかの出張病院で定員が満たされていません。医局員不足から来る勤務医の過重労働も心配ですし、こうした状況は医療ミスの遠因にもなります。

では、医局員の数を増やすにはどうするべきでしょうか。米国なら、札束で人を呼んでくるという方法があるので人集めは簡単ですが、慈恵ではそうはいきません。また一旦、人手不足―過重労働パターンにはまると新入医局員が減り悪循環に陥りますので早期に解決すべき問題になります。やはり、人集めには3)が大事だと思います。日本トップレベルの外科臨床能力があれば、とりあえず人、お金、研究業績、患者などは自然とついてきます。人が集まり、余裕が生じ、その余裕を各人が好きなように使う。お金が必要な人はもっとアルバイトに行き、研究がしたい人は大手を振って研究室に籠もれます。手術が好きな人は十分なスタッフに支えられながら安全な手術が行えます。研究に関しても、忙しい合間にばたばたとやるのでも、上から言われて嫌々とやるのでもなく、時間的余裕と精神的余裕のある環境の中で行うことにより、独自性の高い研究が生まれるようになると思います。こうして各人の目指す医師人生の手助けができる環境を整備、提供し、教授陣が細かいことを言わなければ、きっと多くの医局員が幸福になれる医局を作ることができると思います。逆に、臨床面で誇れるものがなければ、医局員を幸福にする組織を作り、維持するのは難しいでしょう。また、上から押し付けられた研究テーマを遂行するのは辛いでしょうし、論文・業績至上主義の医局では患者思いの臨床医を自負している人にとっては辛いでしょう。

医局のみなさん、医局ライフには遊びと余裕が必要です。医局ライフはひとつではありません。皆さんの価値観に合った医局ライフを追求して、「自分の仕事が好きだ、職場が好きだ」と胸を張って言えるようにしてください。より多くの皆さんがこうした気持ちになって下されば、冒頭に述べた「大学と病院の存在意義と使命」の達成への近道になると確信しています。私はこうしたことを念頭に置き、笑顔のあふれる医局作りのためにも、本年も日本一の血管外科診療を維持することに邁進したいと思います。あとの細かいことは、「let the pieces fall where they may」の気持ちです。

昨年半年間、医局の教室員、職員の皆さんの献身的な働きぶりを直接見て、頭のさがる思いでした。医局員と教室の職員の献身的な貢献なくして教授職も教室も成り立ちません。「Help me to help you」ですので、今年もよろしくお願ひします。